

ハイパフォーマンス・サーフィンの代償

マイケル・ピーターソン

'70年代前半、オーストラリアのすべての主要コンテストを制し、ハワイではバックドアとサンセットで新しいラインを啓示した。'76年プロサーフィン設立時をピークにヘロインと精神的病で没落するが、現在も国民的英雄でサーフィン界の国宝として扱われている。現在も生まれ育ったキラに母親と共に暮らす。

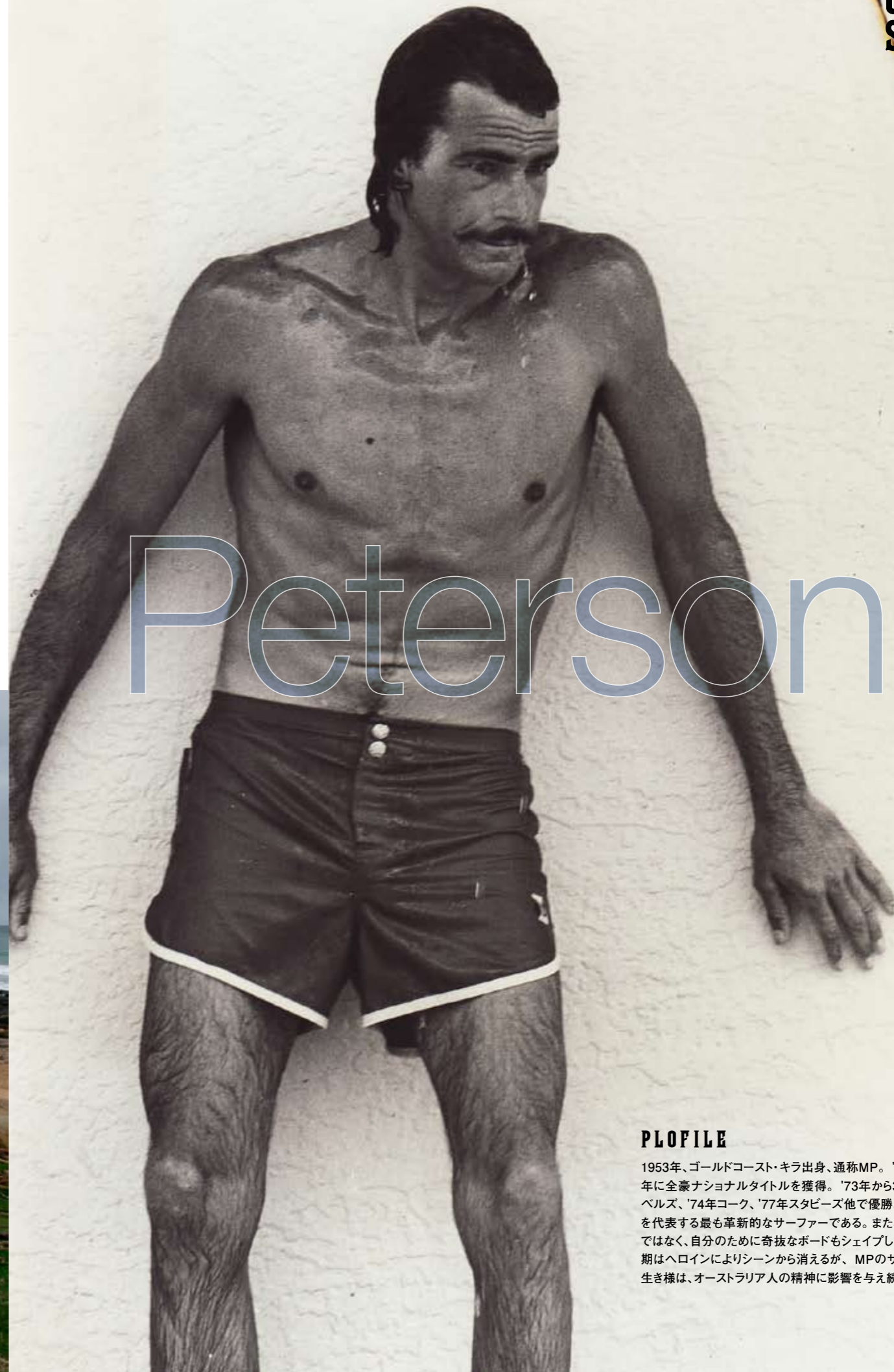
photo © Aitonn, Mistunobu Shibata text © Tadashi Yaguchi



Michael



OUTLAW SURFER 2



Peterson

PROFILE

1953年、ゴールドコースト・キラ出身、通称MP。'72年と'74年に全豪ナショナルタイトルを獲得。'73年から3年連続でベルズ、'74年コーク、'77年スタビーズ他で優勝。'70年代を代表する最も革新的なサーファーである。また、販売目的ではなく、自分のために奇抜なボードもシェイプしている。最期はヘロインによりシーンから消えるが、MPのサーフィンと生き様は、オーストラリア人の精神に影響を与え続けている。



STORY 1 内なる鼓動に導かれ 新しい角度と道を求める 波の上の弾丸アウトロー



MPの生きざまには、どこかネット・ケリーと重なる部分がある。ネット・ケリーとは、オーストラリア犯罪史で最も有名な人物。ギャング団を結成して窃盗、強盗、銀行強盗、殺人にいたる様々の悪行を犯し、最後は26歳で処刑された。だが、民衆には人気があり、その生涯は小説、演劇、映画によって取り上げられている。ネットの警察と争う姿は社会の底辺に暮らす者たちの琴線に触れ、今でも英雄扱いされ、オーストラリア人の精神に深い影響を与えている。「ネット・ケリーのように勇敢に」は未だ使われる慣用語である。オーストラリアは英国からの流刑地として白人の歴史が

始まり、権力への反抗心が強いお国柄である。MPの没落のさまと、反体制な姿に共鳴するものも頷ける。

MPが初めてサーフィンをしたのは11歳、自宅前のキラである。当時は保守的な海のライフセイバークラブ、通称クラブに属していたが、16歳で高校をドロップアウト。ジニアのコンテストに出場しながら、17歳でベルズという大舞台で3位に入賞。当時の仲間はキラのビート・タウンメントとラビット・パソロミニーで、3人はキラとパレーでサーフィンを進化させていた。'72年と'74年には、オーストラリア・ナショナルタイトルを獲得。'73年から3年連続でベルズを制した。

この頃から内向的になり始め、ラビットは「俺を仲間からライバルと見なすようになり、行動がエキセントリックになり始めた」と言う。

なせドラッグに走ったのか？

'70年代、オーストラリアは東南アジアから大量のヘロインが流入していた。それはビーチにも蔓延し、多くのサーファーが海から消えていった。背景にはベトナム反戦やヒッピー・カルチャー以降の虚無感、それに過度な生活保障があった。高校卒業後、仕事をしなくても生活保護が受けられ、サーファーの中には「お国がスポーツしてくれるのさ」と口にする

MPの生きたまには、どこかネット・ケリーと重なる部分がある。ネット・ケリーとは、オーストラリア犯罪史で最も有名な人物。ギャング団を結成して窃盗、強盗、銀行強盗、殺人にいたる様々の悪行を犯し、最後は26歳で処刑された。だが、民衆には人気があり、その生涯は小説、演劇、映画によって取り上げられている。ネットの警察と争う姿は社会の底辺に暮らす者たちの琴線に触れ、今でも英雄扱いされ、オーストラリア人の精神に深い影響を与えている。「ネット・ケリーのように勇敢に」は未だ使われる慣用語である。オーストラリアは英国からの流刑地として白人の歴史が

始まり、権力への反抗心が強いお国柄である。MPの没落のさまと、反体制な姿に共鳴するものも頷ける。

MPが初めてサーフィンをしたのは11歳、自宅前のキラである。当時は保守的な海のライフセイバークラブ、通称クラブに属していたが、16歳で高校をドロップアウト。ジニアのコンテストに出場しながら、17歳でベルズという大舞台で3位に入賞。当時の仲間はキラのビート・タウンメントとラビット・パソロミニーで、3人はキラとパレーでサーフィンを進化させていた。'72年と'74年には、オーストラリア・ナショナルタイトルを獲得。'73年から3年連続でベルズを制した。

この頃から内向的になり始め、ラビットは「俺を仲間からライバルと見なすようになり、行動がエキセントリックになり始めた」と言う。

なせドラッグに走ったのか？

サンディエゴ・ワールドタイトル

1972年、オーストラリア・ナショナルチームは、サンディエゴで開催されるワールド・チャンピオンシップに向った。サーフィン史上最強であろうこのチームのメンバーはMP、ビート・タウンメント、マーク・リチャード、ポール・ニールセン、テリー・フィッツジェラルド、サイモン・アンダーソン等のポスト・クラブパワーの面々であった。全員がお揃いのユニフォームで搭乗したが、MPだけがスーツにサンングラス姿で、まるでマフィアのような見た目。選手やクルービーでこつた返すサ

ンディエゴの一流ホテルにチェックインする際、長髪が多かったオーストラリアチーム一行は怪しまれ、チェックインに時間が掛かった。そこに、毛皮のコートを纏ったデビッド・ヌヒワが、サイケデリックなロールスロイスから現れ、MPを含めたオーストラリア・チーム全員がカルチャーショックを受けた。余談になるが、このとき偶然ハワイアン・チームのマイケル・ホー（14歳）とラリー・バートルマン（17歳）と親しくなる。チェックインから48時間後、ホテルのタオルや備品500ドル相当がなくなり、部屋の修繕費1200ドルが請求されることになる。当時

このコンテストといえは、ホテルごとパーティ会場になることがしばしばあったのだ。だから親達はコンテスト期間中「娘の外出を許さなかつた」というジョークまである。

STORY 2 波の内側を飛ぶ神童は 宇宙的パントマイムで シリンドラーをワープする

MPの最初のビートに、カリフォルニア・ハンティントンビーチの優勝候補の目立ちたがり屋、コーキー・キャロルがいた。コーキーはロングボードで出場し、一番沖で波待ちをしていた。MPはいつもキラでやっているように、コーキーの見えない角度からビークを狙い、ベストの波をキャッチした。それも1度だけでなく何度も、しかもレフトもライトも関係なしにある。このビートはMPがトップ通過でコーキーは敗退した。試合後に激怒するコーキーを見て、MPは車に逃げ込んだ。ハワイのケオニ・ダウニングがMPを祝福するために現われたが、そこに割り込んだコーキーはMPに可能な限りの罵声を浴びせた。最後は「殺してやる」と車の窓からMPを引きずり出そうとする始末。ケオニが「ハイ、兄弟。今すぐ手を離せよ」と仲裁に入り、難を逃れ

MPが最後に公の前に現れたのは、コンテスト中のベストウェイブを捕まえ、キラのようなロング・バレルをメイクした。しかし1名のジャッジを除き、誰もこのライディングを見ていなかった。ただ1人のジャッジは、20点満点中19点という最高得点を付けている。あまりにもバレルの奥深くでライディングしていたため、他のジャッジは見逃していたのである。かくしてMPはワールドタイトルを逃した。優勝はハワイのジミー・ブレア、2位にビート・タウンメントが辛うじて入った。MPがUSAでサーフィンしたのはこれが最初で最後だ。ホテルでMPとラビットはハワイから戻ったばかりのサーファーからノースショアの話を聞き、オーストラリアへの帰路に2週間立ち寄ることを決めた。

MPが最後に公の前に現れたのは、コンテスト中のベストウェイブを捕まえ、キラのようなロング・バレルをメイクした。しかし1名のジャッジを除き、誰もこのライディングを見ていなかった。ただ1人のジャッジは、20点満点中19点という最高得点を付けている。あまりにもバレルの奥深くでライディングしていたため、他のジャッジは見逃していたのである。かくしてMPはワールドタイトルを逃した。優勝はハワイのジミー・ブレア、2位にビート・タウンメントが辛うじて入った。MPがUSAでサーフィンしたのはこれが最初で最後だ。ホテルでMPとラビットはハワイから戻ったばかりのサーファーからノースショアの話を聞き、オーストラリアへの帰路に2週間立ち寄ることを決めた。

こともない4フィートの完璧な波がブレイクしていた。それから1日中サーフィンをして、バナナやパイヤを食べ、コナツツジュースを飲み、キャミー・マーケットまでアイスクリームを買いに行き、3日が過ぎた。3日目の夜に雨が降り、2人はAフレームハウスのペランダに身を隠した。翌朝、ジョイントを加えたオウル・チャップマンとサミー・ホークが2人を見つけて、家に招き入れてくれた。そして事情を知った2人は、ベルジャーランドとサンセットに連れて行った。MPとラビットは2人だけで、さらにポイントの奥の奥まで行き、深いバレルにチャージを繰り返した。そんなサーフィンをやるハワイアンはいなかったため、2人は波を独占することができた。オウルとサムは波が小さい日は姿を現さず、スムージーを飲み、チリムを吸い、ヨガをやりながら時間を過ごしていた。ある日の夜明け、MPは地響きで目を覚まし、ラビットと海を見て唖然とした。12フィートの大

HEARTBREAK FIGHT FOR SON IN RIOT JAIL



Mum's plea
for former
surf champ



カーチェイスの末に逮捕され、翌日の新聞の一面に出た。ファンはヒーローの没落を嘆き悲しんだ

MPの最初のビートに、カリフォルニア・ハンティントンビーチの優勝候補の目立ちたがり屋、コーキー・キャロルがいた。コーキーはロングボードで出場し、一番沖で波待ちをしていた。MPはいつもキラでやっているように、コーキーの見えない角度からビークを狙い、ベストの波をキャッチした。それも1度だけでなく何度も、しかもレフトもライトも関係なしにある。このビートはMPがトップ通過でコーキーは敗退した。試合後に激怒するコーキーを見て、MPは車に逃げ込んだ。ハワイのケオニ・ダウニングがMPを祝福するために現われたが、そこに割り込んだコーキーはMPに可能な限りの罵声を浴びせた。最後は「殺してやる」と車の窓からMPを引きずり出そうとする始末。ケオニが「ハイ、兄弟。今すぐ手を離せよ」と仲裁に入り、難を逃れ

MPが最後に公の前に現れたのは、コンテスト中のベストウェイブを捕まえ、キラのようなロング・バレルをメイクした。しかし1名のジャッジを除き、誰もこのライディングを見ていなかった。ただ1人のジャッジは、20点満点中19点という最高得点を付けている。あまりにもバレルの奥深くでライディングしていたため、他のジャッジは見逃していたのである。かくしてMPはワールドタイトルを逃した。優勝はハワイのジミー・ブレア、2位にビート・タウンメントが辛うじて入った。MPがUSAでサーフィンしたのはこれが最初で最後だ。ホテルでMPとラビットはハワイから戻ったばかりのサーファーからノースショアの話を聞き、オーストラリアへの帰路に2週間立ち寄ることを決めた。

こともない4フィートの完璧な波がブレイクしていた。それから1日中サーフィンをして、バナナやパイヤを食べ、コナツツジュースを飲み、キャミー・マーケットまでアイスクリームを買いに行き、3日が過ぎた。3日目の夜に雨が降り、2人はAフレームハウスのペランダに身を隠した。翌朝、ジョイントを加えたオウル・チャップマンとサミー・ホークが2人を見つけて、家に招き入れてくれた。そして事情を知った2人は、ベルジャーランドとサンセットに連れて行った。MPとラビットは2人だけで、さらにポイントの奥の奥まで行き、深いバレルにチャージを繰り返した。そんなサーフィンをやるハワイアンはいなかったため、2人は波を独占することができた。オウルとサムは波が小さい日は姿を現さず、スムージーを飲み、チリムを吸い、ヨガをやりながら時間を過ごしていた。ある日の夜明け、MPは地響きで目を覚まし、ラビットと海を見て唖然とした。12フィートの大



キラのシリンドラーチューブをパントマイムのように空間移動するMP

Michael Peterson



波、それは2人が今まで見た波で一番大きく、危険を伴ったものだった。オウルとサムはブルーワターのガンをMPとラビットに渡し、4人は沖に向かってパドルアウトした。MPとラビットはインサイドで待つことに決めたが、オウルとサムが2人をアウトサイドに誘導した。そこにはアイカフ兄弟、BK、リノ・アベリラ、ジェフ・ハックマン、ジェームス・ジョーンズといったベストメンバーが揃っていた。また、若きマイケル・ホーの姿もあった。最初の40分、MPは波に乗る素振りさえ見せなかったが、オウルに急かされ最初の波をつかんだ。それはMPにとって最大のサイズだった。8本を乗り、



初めてのサンセットでのセッションから戻ったMPは「生きて良かった」とラビットと語り合い、やがて天下を取った気分にならなくなった。翌日オウルは「パイプに行こう」と2人にオウルとサムを渡した。それから1週間、オウルのすべてを教えた。サンセットのアーティスティックな瞬間は、サンディエゴからシドニーに戻る途中のオーストラリア・チーム一行がパイプを訪れた瞬間、終わりに向かった。サイモン・アンダーソンやマーク・ウオーレン等はコンテストの如くパイプのピークを目指し、最初にテイクオフしたコルスマスはリップとともにボトムに叩きつけられ病院送りとなり、その夜シドニーへ戻った。ラビットはオーストラリアチームと帰国したが、MPはノースショアに滞在することを決めた。サイケデリックなドラッグとチリムを吸いながら、結局3ヶ月間ハワイに滞在し

STORY 3 混沌のなかで没落した英雄は 伝説のヒーローとなり 永遠に語り継がれていく

た。このときバンカー・スプレケルにも遭遇し、2人は意気投合している。これ以降MPは3年に渡ってノースショアに通うが、事件は'74年に起きた。パイプラインが完璧な8フィートの朝、MPは単独で沖に出た。ラインナップにはロベスやベン・アイバ等が顔を揃えていた。MPはハワイアンらしい強いプレッシャーを受け、奥へ奥へと追いやられ、ついにはタパーとされるライトにテイクオフしければならない状況になった。かつてバンカー・スプレケルがパイプラインのライトをメイクしているが、この日はそれよりも数段サイズがあり、つまりエグレットボトムから巻き上がり、ほとんどクロウズアウトの波だった。だからハワイアンにしてもライトに行く者は誰ひとりいなかった。1時間以上追いやられ、波を待ち続けた。ついにMPは切り立ったピークの奥からレイト・テイクオフを試みた。誰もが「まさか」と思ったはずだ。ラインナップのサーファーは、波の裏側からMPの行方を追う。オフショアに煽られてリップが水飛沫を上げ、インスタントな虹を創る。インサイドのドライリーフ手

前でブルアウトするMPを見て、誰よりも追い込んだベン・アイバは驚愕したという。実際MPはキラのチューブの中を走るようにバックドアをメイクしている。その姿はフィルム「シー・フォー・ユアセルフ」に残されている。これ以降、ベン・アイバはMPを目の敵にしたようである。数日後サンセットで、MPはいつものキラでするように誰よりも奥からテイクオフし、口笛を吹いてドロップインを阻止した。だがアイバは同時に少しだけインサイドでテイクオフをしており、2人はワイプアウトした。ホワイトウオーターから浮かび上がると、アイバはMPのボードで沖に上がってしまった。MPはアイバのボードで遅れてビーチに上がった。アイバは威嚇的にMPに近づくと手にしたボードを叩きつけてフィンをもぎ取り、殴りかかった。パンチを顔面に喰らいながらもMPはアイバのボードを同じように叩きつける。再びアイバがパンチを繰り出し乱闘になると、そこに現れたのがオウル・チャップマンだった。4年前カルフォルニアからノースに移住したオウルもハワイアンがハオレ（白

人)に抱く人種差別に悩ませられただけに、原因ととりあえずの解決法を知っていたのだ。その後'76年、ラビットがブラックシヨーツ団の襲撃を受け、ハワイアンとオージーの対立が表面化するが、MPは'74年を最後にハワイへ行かなくなった。

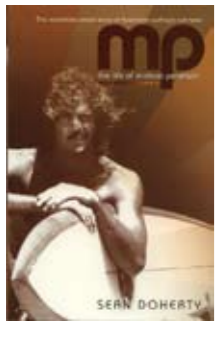
連勝街道暴進

'74年ハワイから戻り、MPはコンテストで負けなしの連勝を続けた。しかしこの頃から彼の行動はおかしくなり始めた。コンテストではいつもヒート開始の数秒前に現われ、表彰式では下を向いたまま。優勝インタビューでははつきり喋らず、一言も発しないこともあった。それどころか、優勝発表のアナウンスの前に消えることもしばしばあった。大観衆の前での緊張は、内向的なMPを混沌に追い込んだ。現実逃避するかのようになり、リファンからロイン、サイケデリックなドラッグで常軌を逸し始めたのだ。誰とも接したくない、だからMPは長いことシエイブルームに籠り、奇抜なボードを削り続けた。

MP最後の試合

プロサーフィンサーキット設立2年目の1977年、バーレーで開催されたスタビーズがMPにとって事実上の最後の試合だった。その前にローカルコンテストに2度出場したが、ファイナルには2回とも現われなかった。プロ2年目に新たに加えられたスタビーズは、ツアー2番目の賞金額で、しかもコンテスト・ディレクターのビル・ホフマンは、奇才ピーター・ドゥルーエン(1970年オーストラリア・タイトル保持者)を雇い、それまでの5〜6人ヒートから初のマン・ツー・マンのトーナメント形式を採用した。今日のWCTでのマン・ツー・マンは、ここから始まっている。ドゥルーエンが提案する「最高の波で最高のサーフィン」が実現し、開催場所は「バレーヘッズ」に決定。サーフィンコンテストでは考えられない、ロックフェスティバルのような大観衆が押し寄せ、その数は2万人に膨れ上がった。MPはファイナルで20歳のMRことマーク・リチャードと対戦。MRは両手を羽ばたくように広げる独特なスタイルで、オーストラリア・ジュニアを制し、3ヶ月前にはハワイでのスミノロフ(ワイメア)と、ワールドカップ(サンセットビーチ)の2試合でファイナルに残っている。その後MRは'79年から4年連続でワールドタイトルを獲得する。

波は6フィート、樽を転がしたようなチューブが巻くバーレーでMRは9.5点(10点満点)を4本叩き出し、競技面から見れば完璧だった。一方のMPは競技を超えたレベルでサーフィンをしていった。MPのサーフィンは、得点を付けられるレベルではなかっただろう。急角度に上がったリップに当



伝記がベストセラーになり、国営放送はMPのドキュメンタリーを放送。アンドリュー・キッドマンの新作はMPストーリー



トレードマークのレイバンはストーンした目を隠すためと言われるが、実はナイフで他人の目を直視しなかった

て込むと、そのままチューブの奥深くに消えいく。そんなサーフィンをやる者は当時MP以外に誰もいなかったし、できなかった。夢で見るマニョバーだったのだ。他のサーファーと余りにもかけ離れたMPの得点は、10点満点2本と9点を2本。サーフィンコンテスト史上、今だ語られる激戦である。ウェバー3兄弟が8ミリフィルムで撮影した「リキッド・タイム」でその様子を見ることが出来る。

MP 9.0 9.0 10.0 9.0 10.0
MR 7.5 9.5 9.5 9.5 9.5

得点上は僅差だが、10点満点は10点以上を意味すること忘れてはならない。つまりMPとMRのスタビーズでのファイナルの場合、9.5点と10点の差は永遠に埋まらないほどの差だったということだ。ファイナルが終わる、MPは結果が出るまでにシャワーを浴びようとした。今も同じ場所にあるバレーヘッズのクラブハウスに隣接する公共の屋外シャワーである。そこでMPは一瞬よめいた。その瞬間をオーストラリア・サーフィン・ワールド誌のヒュー・マックロードが迷わず撮影。それが32ページの1枚だ。ヒューは「マイケルはドラッグでふらついていたのではなく、MRとの一騎打ちですべてを燃焼していたようだった」と回想する。MPにとって稀な真剣勝負だったのだ。これを境に、MPはキラカバレーが余程良いとき以外は海に入らなくなった。MPが一瞬よめいたバレーヘッズの同じ場所には、MPが亡霊の如く上手く落書きされ(33ページ)、今も現存する。